粕屋町文化財調査報告書第 58 集

内橋登り上り遺跡第 6 地点

2022
粕屋町教育委員会

はじめに

本書は、県道福岡東環状線拡幅工事に伴い、令和２（2020）年度に粕屋町教育委員会が実施した内橋登り上り遺跡第６地点の発掘調査の記録であります。

調査地周辺は古代の遺跡が多く存在し、糟屋郡最大級規模の掘立柱建物や大宰府式鬼瓦が出土した内橋坪見遺跡、精巧で大型の横板組井戸と貴資専用の精美な土師器が見つかった内橋牛切遺跡、朝鮮半島系遺物が出土した内橋鏡遺跡や内橋柚ノ木遺跡、多々良川の河口で物資集積施設として栄えた多々良込田遺跡、糟屋評（郡）衙に比定される国史跡阿恵官衙遺跡などの奈良時代の遺跡が周囲にあります。さらに大宰府と都を結ぶ駅路が調査地近辺を通過していることからみましても、海上・河川・陸上交通が交わる重要な地域であったことがうかがわれます。

このような立地環境のもと、内橋登り上り遺跡第６地点では、同時期の土坑群を検出し、さらなる遺跡の広がりが確認されました。今後、周辺地の調査が進むにつれて、対外交流の状況が次第に明らかになっていくことと思います。本書が郷土の歴史に誇りを持ち、文化財に対する理解を深める上で広く活用されるとともに、研究資料としても貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました関係者の方々をはじめ、近隣住民の皆様に心から謝意を表します。

令和４年３月31日
粕屋町教育委員会
教育長　西村　久朝

目　次

3　経過・位置と環境
4 調査に至る経過
4 調査体制
4 地理的環境
4 歴史的環境

7　調査成果
8 遺跡の概要
10 掘立柱建物
10 土坑
26 溝状遺構
27 SP 出土遺物
28 おわりに

31　図版

発行	粕屋町教育委員会
調査起因	県道福岡東環状線拡幅工事
現地調査	令和２(2020)年７月８日～令和２(2020)年12月11日
整理調査	令和３(2021)年４月１日～令和４(2022)年３月31日
使用方位	座標北(国土座標第Ⅱ系「世界測地系」)。真北に対して0°17′西偏。
遺構実測・遺構製図	株式会社島田組九州支店
遺物実測	福島日出海、常盤拓生、尾方禎莉
遺構撮影	西垣彰博
執筆	福島日出海
遺物製図・遺物撮影・編集	高橋幸作
資料整理	岡部有貴、常盤拓生、水上良行、沼山旅羽

本書に関わる遺物・記録類は、粕屋町立歴史資料館にて収蔵・管理し、公開する予定である。

経過・位置と環境

経過・位置と環境

調査に至る経過

内橋登り上り遺跡第６地点の調査は、福岡県糟屋郡粕屋町大字内橋字横枕295-5、295-9、561-5において、福岡県福岡県土整備事務所より令和元年12月11日に県道福岡東環状線拡幅工事に伴う埋蔵文化財事前審査願書が提出されたことに起因する。

当該計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である内橋登り上り遺跡に隣接していたため、同年12月19日、20日に試掘調査を実施したところ、古墳時代から奈良時代にかけての遺構、遺物を検出した。この調査結果に基づき協議を重ねたが、工法計画の変更は難しく、記録保存の発掘調査実施後に工事を着手することとなった。発掘調査は令和２年７月８日～令和２年12月11日、発掘調査報告書作成に係る遺物整理作業は令和３年４月１日～令和４年３月31日の期間において実施した。発掘調査にかかる遺構掘削業務及び遺構図面作成業務に関しては株式会社島田組九州支店へ委託した。出土遺物および図面・写真等の記録類は粕屋町立歴史資料館にて保管している。

また、地域住民の方々をはじめ、関係者の皆様には調査の趣旨にご理解を得るとともに、多大なご協力を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

調査体制

令和２(2020)年度
調査主体　粕屋町教育委員会
教育長　西村 久朝
社会教育課長　新宅 信久
同課文化財係主幹　西垣 彰博
同課同係主任主事　髙橋 幸作
同課同係会計年度任用職員
朝原泰介、上田津由美、福島日出海（調査担当）、毛利須寿代、松永メイ子

令和３(2021)年度
調査主体　粕屋町教育委員会
教育長　西村久朝
社会教育課長　新宅信久
同課文化財係主幹　西垣彰博
同課同係主任主事　髙橋幸作
同課同係会計年度任用職員
常盤津由美、尾方禎莉、福島日出海（報告書担当）、毛利須寿代、松永メイ子、常盤拓生、水上良行、岡部有貴、沼山旅羽

地理的環境

福岡県糟屋郡粕屋町は、福岡市の東に隣接し、粕屋平野の中央に位置している。町域は14.13km²と狭く、大半が平坦な地勢である。

粕屋平野の西は博多湾に面し、南側は四王寺丘陵部によって福岡平野と区分される。東側の三郡山地を源とする３本の河川が平野を貫流し、北から多々良川、須恵川、宇美川の順で博多湾へ注いでいる。平野の北側には立花丘陵部があり、博多湾に面して周りを山地で囲まれた小さな平野である。東の三郡山地から舌状に派生する低丘陵が多く、平坦な地勢の割に沖積地は河川流域に限られている。

内橋登り上り遺跡第６地点が位置する博多湾沿岸は、多々良川・須恵川・宇美川が河口付近で合流し、古代においては入江状の内海を形成していた。遺跡はこの内海に近く、海上・河川交通の集中する地域に立地している。

歴史的環境

粕屋町周辺は、博多湾東岸に位置するという立地環境もあり、早くから大陸・朝鮮半島との交流が認められる地域である。多々良川流域には、松菊里型住居で構成された渡来系稲作集落である江辻遺跡が弥生時代早期に登場する。

弥生時代には青銅器生産が知られる地域でもあり、多々良川対岸の土井遺跡群（福岡市）、多々良大牟田遺跡群（福岡市）では青銅器鋳型が出土している。粕屋町域でも、内橋坪見遺跡と内橋登り上り遺跡で青銅製鋤先、戸原鹿田遺跡で銅鏃、阿恵古屋敷遺跡では銅矛中子が出土している。青銅器生産を基盤とした集落展開の様相が明らかになりつつある。

このような地域的まとまりを背景に、古墳時代になると多々良川

駅路推定線は、日野尚志「比恵・那珂遺跡群を中心にして諸問題を考える」『那珂 38』福岡市教育委員会 2005 を参考とした。

図 1　内橋登り上り遺跡第 6 地点周辺図(1/2,500)

流域に前期前方後円墳である戸原王塚古墳、内橋カラヤ古墳、名島古墳（福岡市）が築造される。その後、中期には首長系譜が途切れるが、後期になると推定全長75m ほどの前方後円墳である鶴見塚古墳が須恵川流域に築造される。現況は宅地化が進んで半壊状態であるものの、近世地誌『筑前国続風土記拾遺』に江戸時代当時の鶴見塚古墳の状況が詳細な計測値とともに記されており、周溝を含めた全長約 86m、後円部南側に横穴式石室が開口して内部に石屋形が安置されていることをはじめ、墳丘形態・石室規模なども克明に読み取れる。これは那津官家の管掌者といわれる東光寺剣塚古墳（福岡市）と同規模・同主体部であり、『日本書紀』継体 22 年の糟屋屯倉との関連が示唆される。

また、戸原寺田遺跡では、6 世紀後半から 7 世紀前半の鍛冶関連遺構のほか、紡いだ糸を巻き取る枠（かせ）の腕木が出土するなど、手工業に関わる集落が確認されていて、それに隣接する戸原御堂の原遺跡では同時期の倉庫群も見つかっている。ミヤケの時代の拠点的な集落の状況も明らかになりつつある。

粕屋町は、古代において筑前国糟屋郡に属し、須恵川下流域の阿恵官衙遺跡で糟屋評衙・郡衙が発見され国史跡に指定されている。

阿恵官衙遺跡は、7 世紀後半から 8 世紀後半にかけて、政庁と正倉という地方官衙の主要施設の全体像を捉えながら、評衙の出現から郡衙の最盛期に至るまで地方官衙の変遷を追うことができる国内でも稀な遺跡である。さらに、698 年の京都妙心寺梵鐘銘「糟屋評造春米連廣國」により、評造名が判明している。まさに、阿恵官衙遺跡の政庁において「春米連廣國」が評造として政務をおこなっていたことが特定された。

8 世紀前半に阿恵官衙遺跡の政庁が移転した後（正倉は 8 世紀後半まで残る）、郡衙の移転先はいくつか候補地がある。谷を隔てた北側の微高地上にある阿恵原口遺跡は、阿恵官衙遺跡の政庁と同じ方位の官衙建物が直交に配置されている。周辺にも官衙建物が展開している可能性がある。また、阿恵官衙遺跡の東方約 0.9km の地点に 1 町四方の区画があり、『筑前国続風土記拾遺』では「長者の屋敷跡」と記されている。遺構は確認できていないが、区画の方位が阿恵官衙遺跡の政庁と同じであり、有力な候補地の一つである。さらに、「長者の屋敷跡」の南約 100m にある原町平原遺跡では、大型の建物跡が発見されている。建物の主軸方位が正方位をとり、阿恵官衙遺跡の正倉群と同じであることから、8 世紀後半の郡衙関連施設である可能性が高い。

また、阿恵官衙遺跡は官道が交差する衢（ちまた）に立地することが明らで、そのうちの駅路は大宰府と都を結ぶ大路であり、この駅路沿いに内橋坪見遺跡が位置する。大宰府式鬼瓦、赤色顔料が付着した隅切軒平瓦など多量の瓦が出土し、大型の建物群と囲繞施設をともなうことから、駅家（ひなもり）（夷守駅）の可能性が高いと考えられる。

粕屋町周辺は、郡衙、駅家、官道、港、寺院などがあり、古代史を考えるうえで鍵となる重要な要素をもつ地域である。

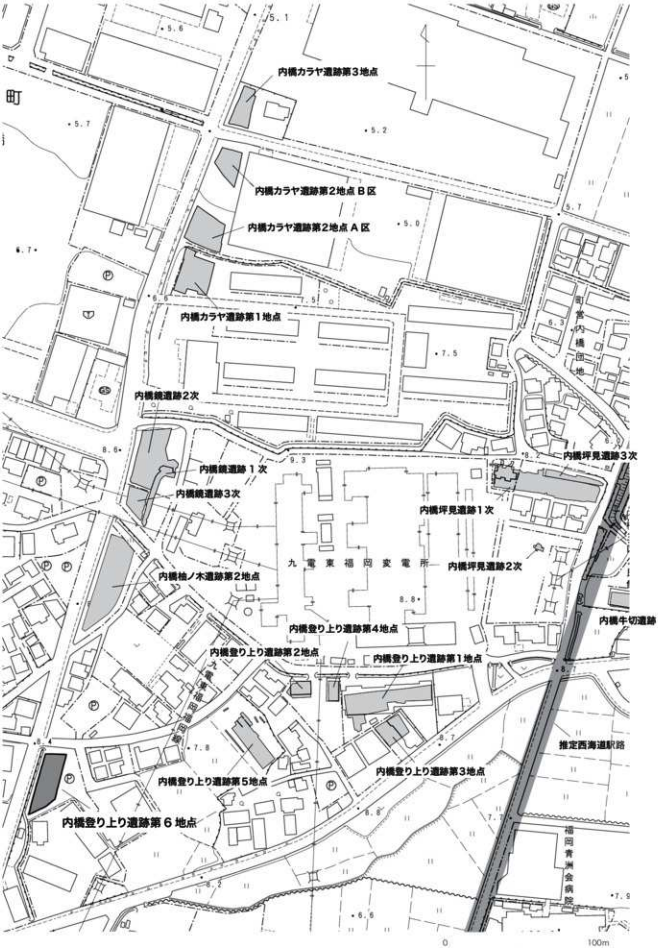


図2　調査地周辺図(1/2,500)

調査成果

調査成果

調査では、掘立柱建物１棟、土坑、溝状遺構、多数のピット等を検出した。遺物は、主に８世紀後半を中心とする須恵器と土師器類で、須恵器の杯身１点の底部には墨書が観察された。

遺跡の概要

内橋登り上り遺跡第６地点は、標高約７ｍの微高地上に立地し、７世紀を中心とする集落遺跡である内橋柚ノ木遺跡第２地点から、南南西に100ｍほどに位置する。調査では、掘立柱建物１棟、土坑18基、溝状遺構４条、多数のピット等が検出され、須恵器や土師器を中心とする遺物群を確認した。調査区の北側では、１間×1間規模の掘立柱建物が検出されたが、その周囲は削平が進んでおり検出遺構もまばらであった。調査区中央部付近では、切り合い状況が著しい土坑群が検出された。平面形は隅丸方形を呈し、小型の竪穴建物に近似するが、柱穴やカマドは存在しない。ピット群は、調査区の中央から南側にかなり密に分布しており、土坑群との切り合いは顕著であった。本来は、掘立柱建物の柱穴とも考えられるが、残念ながら、建物としての並びを捉えることが出来なかった。遺物は、８世紀後半を中心とする須恵器、土師器類が中心となり数点の瓦片も含まれる。また、須恵器の杯身１点の底部には、墨書が観察された。

図３　内橋登り上り遺跡第６地点周辺図（1/1,000）

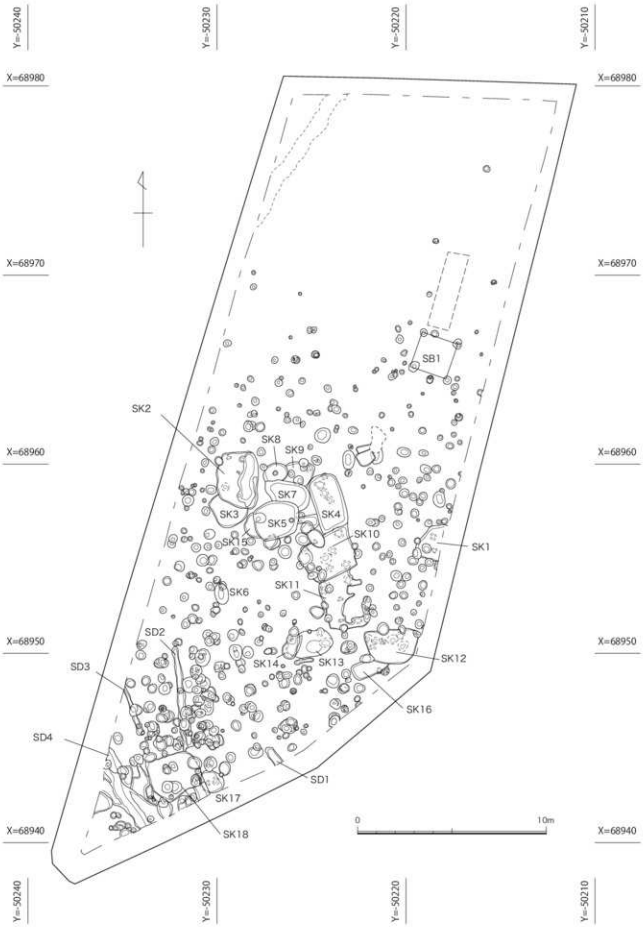


図4　内横登り上り遺跡第６地点全体図(1/200)

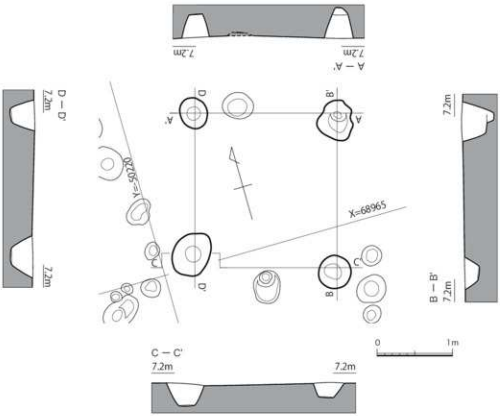


図5　SB1 平面図、断面図（1/50）

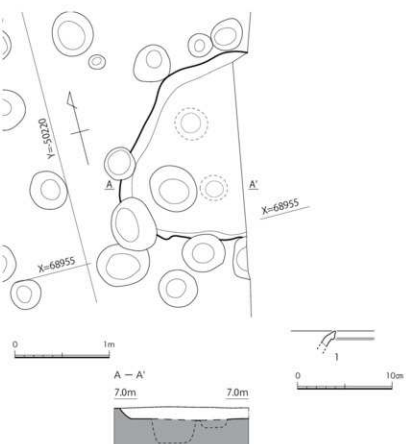


図6　SK1 平面図、断面図（1/40）、出土遺物実測図（1/4）

掘立柱建物

SB1（図5）

調査区の北側に位置する。桁行は西側 1.86 m、東側 2.03 m とやや歪であるが、梁行は南北両側とも 1.87 m を測る。建物の主軸方位は N−15.5°−E を示す。出土遺物はない。

土坑

SK1（図6）

調査区東側端部に位置しており、遺構の半分以上が調査区外に存在する状況で検出された。平面形は不明で、規模は確認部分で長さ 2.0 m、幅 1.30 m、深さ 0.93 m を測る。

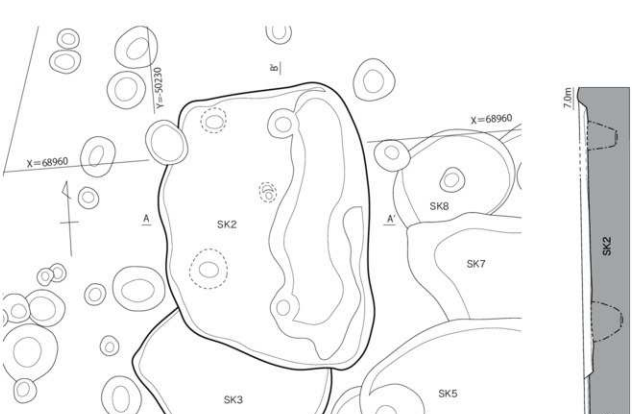


図7　SK2、3平面図、断面図(1/40)

SK1 出土遺物（図 6）

1 赤焼土器、甕、残高 1.7cm を測る。色調はにぶい橙色、胎土に砂粒を含む。焼成は良好。

SK2（図 7）

平面形は隅丸の台形状を呈し、SK3 を切っている。断面 B－B' のライン上には 2 基のピットが存在し、同じライン上に溝状の窪みも存在する。長さ 2.95 m、幅 2.18 m、深さ 0.17 m を測る。

SK2 出土遺物（図 8）

1 須恵器、杯蓋、器高がやや高いボタン状のつまみが付く。残高 2.1cm を測る。色調は暗青灰色、胎土に砂粒を少し含み、焼成は良好。**2** 須恵器、杯蓋、天井部が直線的で低平、平坦なボタン状のつまみが付く。残高 1.2cm を測る。色調は灰色、胎土、焼成はともに良好。**3** 須恵器、杯蓋、器高は高いようで、口縁端部は明確な嘴状を呈す。残高 1.4cm を測る。色調は灰黄褐色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。**4** 須恵器、杯蓋、器高は低く低平、口縁端部は嘴状を呈すが、丸みを帯びて鈍い。口径 18cm、残高 0.7cm を測る。色調は青灰色、胎土に砂粒を含み、焼成は良好。**5** 須恵器、杯蓋、器高は低く低平、口縁端部はわずかに嘴状を留める。口径 15.6cm、残高 1.9cm を測る。色調は青灰色、胎土に砂粒及び白色粒を含み、焼成は良好。**6** 須恵器、杯蓋、器高は低く低平、口縁端部は嘴状の痕跡を残す。口径 15.4cm、残高 1.3cm を測る。色調は淡灰黄色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良い。**7** 須恵器、杯蓋、器高は低く低平、口縁端部は嘴状の痕跡を残す。口径 18cm、残高

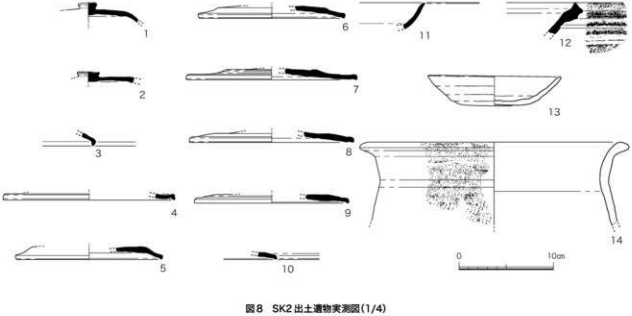


図8　SK2出土遺物実測図(1/4)

1.2cmを測る。色調は灰黄白色、胎土に砂粒を含み、焼成はやや不良。8須恵器、杯蓋、器高は低く低平で、口縁端部は嘴状の痕跡を残す。口径17.4cm、残高1.1cmを測る。色調は淡灰黄色、胎土に砂粒を含み、焼成は良好。9須恵器、杯蓋、器高は低く低平、口縁端部は内面に嘴状の痕跡を残す。口径15.8cm、残高0.9cmを測る。色調は淡灰色、胎土に砂粒を含み、焼成は良好。10須恵器、杯蓋、器高は低く低平、口縁端部は嘴状の痕跡を残す。残高0.8cmを測る。色調は淡灰色、胎土に砂粒を含み、焼成は良好。11須恵器、椀の口縁部片か。体部は丸みを帯び口縁部がわずかに開く。残高2.8cmを測る。色調は青灰色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。12須恵器、甕、大きく開く口縁部の内面は凹面を呈し、外面は三角突帯状に隆起し下部に1条の沈線が廻る。残高3.3cmを測る。色調は黄灰色、胎土にやや粗い砂粒を含み、焼成は良好。13土師器、杯身、口縁部は直線的に大きく開き器高は低い。底部はヘラ切後にナデを施す。口径14.1cm、器高3.2cm、底径6.2cmを測る。色調は暗橙色、胎土に粗い石英粒を含み、焼成は良好。14赤焼土器、甕、大きく外反する口縁部は厚みがあり、口縁端部は丸みを持つ。肩部は張らず緩やかに下方に開く。胴部外面に縦位の平行タタキメが見られる。口径27.0cm、残高8.8cmを測る。色調は橙色、胎土に砂粒を多く含み、焼成は良い。

SK3（図7）

平面形は隅丸方形を呈すと考えられるが、北側をSK2に大きく切られる。長さ1.89m、残幅1.73m、深さ0.06mを測る。出土遺物はない。

SK4（図9）

平面形は南北に長い隅丸長方形を呈し、SK10を切っている。長さ2.93m、幅1.60m、深さ0.16mを測る。

SK4出土遺物（図10）

1須恵器、杯蓋、天井部が直線的で低平、平坦なボタン状のつまみがつく。残高1.4cmを測る。色調は淡灰色、胎土は細砂粒を少し含み、焼成は良い。2須恵器、杯蓋、器高は低く低平、口縁端部はわずかに丸みのある嘴状を留める。口径16.0cm、残高1.5cmを測る。色調は灰色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。3須恵器、杯蓋、器高は低く低平、口縁端部はわずかに丸みのある嘴状を留める。口径16.6cm、残高1.1cmを測る。色調は灰色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。4須恵器、杯蓋、器高は低く低平、口縁端部は嘴状の痕跡を残す。口径15.8cm、残高0.9cmを測る。色調はにぶい灰褐色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。5須恵器、杯蓋、器高はやや高く丸みをもち、口縁端部はわずかに凹面を呈すが、内面の窪みは無く平坦に近い。口径16.2cm、残高1.7cmを測る。色調は黄灰色、胎土には細砂粒を含み、焼成は不良。6須恵器杯蓋、器高はやや高く天井部は平坦で、

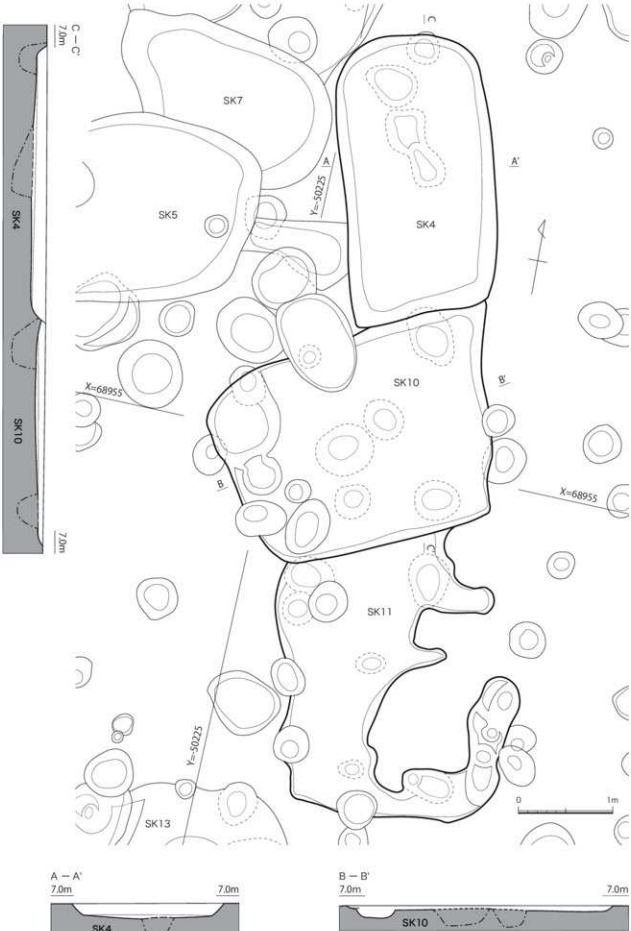


図 9　SK4、10、11 平面図、断面図(1/40)

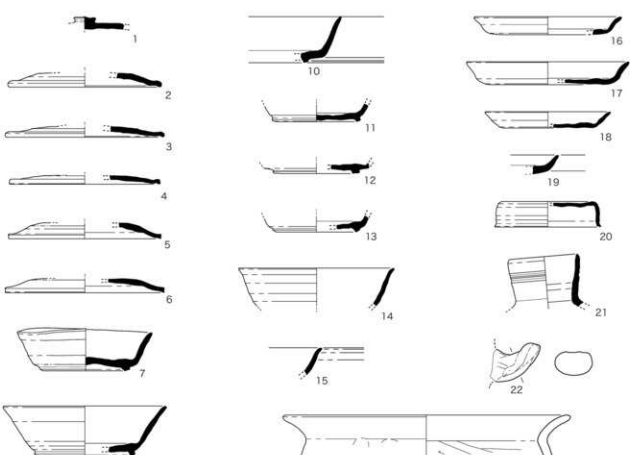


図10　SK4 出土遺物実測図（1/4）

口縁端部はわずかに凹面を呈すが、内面の窪みは無く平坦に近い。口径 16.8cm、残高 1.5cm を測る。色調は淡灰色、胎土には細砂粒を含み、焼成は良好。**7** 須恵器、杯身、口縁部は外反し全体に歪んでおり、高台は低く外方に傾斜する。口径 14.2cm、器高 4.9cm、底径 8.6cm を測る。色調は灰色、胎土にやや粗い砂粒を含み、焼成は良好。**8** 須恵器、杯身、口縁部は大きく外反し、高台と接する体部下方は張りが無く、細身の高台は外方に傾斜する。口径 17.0cm、器高 5.3cm、底径 9.6cm を測る。色調は淡灰色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良い。**9** 須恵器、杯身、口縁部は屈折気味に外反し、体部は安定して下方がやや張る。高台はやや高く外方に張り出すが細身である。口径 16.8cm、器高 5.4cm、底径 11.2cm を測る。色調は淡灰色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。**10** 須恵器、杯身、口縁部は外反し体部下方が角張り、高台と接する部分が長く低い高台が外方に傾斜する。残高 6.8cm を測る。色調は淡灰色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。**11** 須恵器、杯身、高台と接する体部下方は張がなく、細身の低い高台が外方に傾斜する。残高 2.8cm、底径 7.4cm を測る。色調は淡灰色、胎土に砂粒を含み、焼成は良い。**12** 須恵器、杯身、高台と接する体部下方は直線的に張り出し、幅広だがかなり低い高台が付く。残高 1.1cm、底径 9.0cm を測る。色調は暗灰色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。**13** 須恵器、杯身、高台と接する体部下方は張がなく、低い高台は外方に傾斜し、2mm 程度とわずかな高さである。残高 1.7cm、底径 8.2cm を測る。色調は灰色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。**14** 須恵器、杯身、口縁部は外反し体部に丸みを持つ。口径 16.4cm、残高 4.0cm を測る。色調は灰白色、胎土にわずかな細砂粒を含み、焼成は良好。**15** 須恵器、杯身、口縁部は外反し体部が丸みを持って緩やかに内湾する。残高 2.9cm を測る。色調は青灰色、

胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。**16** 須恵器、皿、口縁部は曲線的に外反する。口径 15.4cm、器高 1.9cm、底径 11.9cm を測る。色調は灰色、胎土に砂粒を含み、焼成は良好。**17** 須恵器、皿、口縁部は曲線的に外反し、器高がやや高い。口径 17.0cm、器高 2.4cm、底径 13.0cm を測る。色調は淡灰色、胎土にやや粗い砂粒を含み、焼成は良い。**18** 須恵器、皿、口縁部は直線的に外反する。口径 13.2cm、器高 1.7cm、底径 10.2cm を測る。色調は灰色、胎土にやや粗い砂粒を含み、焼成は良好。**19** 須恵器、皿、口縁部は直線的に外反するが底部付近は丸みを持って内湾する。残高 2.0cm を測る。色調は淡灰色、胎土に粗い砂粒を含み、焼成は良い。**20** 須恵器、短頸壺の蓋、体部は直立し口縁端部が強く外反する。天井部は全体に緩やかな凹面を呈し、つまみ部は欠損する。口径 11.2cm、器高 2.7cm、天井部径 9.6cm を測る。色調は淡灰色、胎土に砂粒を含み、焼成は良好。**21** 須恵器、平瓶の口縁部、口縁部は緩やかに開き、途中に 2 条の沈線が廻る。口径 7.0cm、残高 5.6cm を測る。色調は淡灰黄色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。**22** 土師器、甑の把手、断面形が扁平な幅広状を呈す。調整は指頭によるナデとオサエ。残長 5.2cm、幅 4.1cm、厚さ 2.4cm

図11　SK5、7、8、9、15平面図、断面図(1/40)

を測る。色調は淡橙色、胎土に砂粒を含み、焼成は良い。**23** 土師器、甕、口縁部がくの字状に緩やかに外反し、胴部は直線的に広がる。調整は頸部に指頭によるオサエがあり、外面には縦位のハケメ、内面には横位のヘラケズリが施される。口径 29.6cm、残高 10.0cm を測る。色調は淡橙色、胎土にやや粗い砂粒及び石英粒を含み、焼成は良い。

SK5（図 11）

平面形は東西にやや長い隅丸長方形を呈し、東西両端部にピットを有する点は SK2 に近いが、長軸方向が 90° 異なっている。SK7 と SK15 を大きく切っており、5 基の土坑が切り合う中にあって最も新しい存在である。長さ 2.40 m、幅 2.00 m、深さ 0.16 m を測る。

SK5 出土遺物（図 12）

1 須恵器、杯蓋、器高はやや高く全体に丸みを持つ。口縁端部は丸みを帯びて玉縁状を呈し、嘴状を留めていない。口径 16.0cm、残高 2.7cm を測る。色調は灰色、胎土に粗い石英粒を含み、焼成は良好。**2** 須恵器、杯蓋、口縁端部を折り曲げ明確な嘴状を呈す。残高 1.7cm を測る。色調は灰色、胎土、焼成ともに良好。**3** 須恵器、杯蓋、器高が高く全体に丸みのある形状と考える。口縁端部は明確な嘴状を呈し、外面の屈折部も明確な稜線を示す。残高 2.4cm を測る。色調は灰色、胎土に砂粒を少し含み、焼成は良好。**4** 須恵器、杯蓋、口縁端部は明確な嘴状を呈す。残高 1.5cm を測る。色調は灰色、胎土に白色粒子を含み、焼成はやや不良。**5** 須恵器、杯蓋、器高は低く低平と考えられ、口縁端部は丸みのある嘴状を留める。残高 1.2cm を測る。色調は灰色、胎土に白色粒子を多く含み、焼成はやや不良。**6** 須恵器、杯蓋、器高はやや高く、口縁端部は丸みを帯びてわずかに嘴状を留める。残高 2.2cm を測る。色調は灰色、胎土に白色粒子を含み、焼成は良好。**7** 須恵器、杯蓋、口縁部が直線的で器高はやや低いと考えられ、口縁端部は嘴状を呈し、前面がやや凹面をなす。残高 1.9cm を測る。色調は青灰色、胎土にやや粗い石英粒を含み、焼成は良好。**8** 須恵器、杯身、高台はやや高く幅もあってしっかり直立する。残高 1.8cm、底径 7.8cm を測る。色調は灰白色、胎土は良好、焼成は不良で軟質。**9** 須恵器、杯身、口縁部は直線的に開き、底部は回転ヘラ切後ナデを施す。口径 12cm、器高 3.7cm、底径 6.6cm を測る。色調は灰白色、胎土に白色粒子を少し含み、焼成は不良で軟質。**10** 須恵器、高杯、口縁部は直立し、外面が凹面状を呈す。口縁端部は少し突出する。口径 19.4cm、残高 2.0cm を測る。色調は灰白色、胎土、焼成ともに良好。**11** 須恵器、高杯脚部片、脚部末端が嘴状を呈す。残高 1.2cm、底径 11.6cm を測る。色調は灰色、胎土、焼成ともに良好。**12** 赤焼土器、甕、口縁部は外湾して大きく開き、頸部から少し開

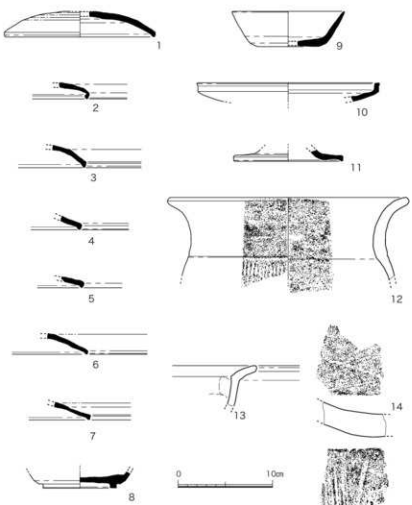


図 12　SK5 出土遺物実測図 (1/4)

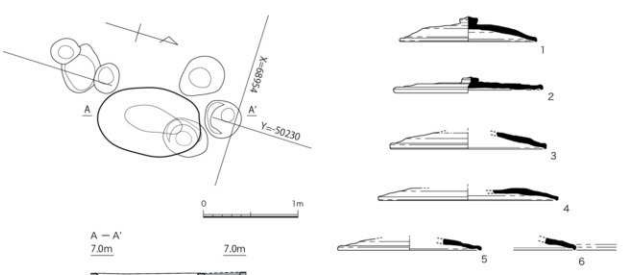


図13　SK6平面図、断面図(1/40)、出土遺物実測図(1/4)

き気味に胴部へと移行するが、肩部の張り出しはない。外面には縦位の平行タタキメ、内面には当具痕が観察される。口径24.6cm、残高8.7cmを測る。色調は橙色、胎土に砂粒を含み、焼成は良い。**13** 土師器、甕、口縁部は水平に近く外反し、頸部内面は突出して明確な稜線を描く。外面はナデ、内面はヘラケズリが施される。残高4.3cmを測る。色調はにぶい橙色、胎土に砂粒を多く含み、焼成は不良で脆い。**14** 平瓦片で内面にはコビキ痕と布目痕が、外面には縄目のタタキ痕が観察される。残長7.0cm、残幅7.0cm、厚さ2.4cmを測る。色調は灰白色、胎土に細砂粒を多く含み、焼成は不良で軟質。

SK6（図13）

平面形は南北に長い楕円形のやや大きなピット状を呈す。長さ1.10 m、幅0.70 m、深さ0.38 mを測る。

SK6 出土遺物（図13）

1 須恵器、杯蓋、器高がやや高く全体に丸みを帯び、扁平な擬宝珠状のつまみがつく。口縁端部は、丸みを帯びて嘴状をわずかに留める。口径14.6cm、器高2.6cmを測る。色調は灰色、胎土に石英粒を少し含み、焼成は良好。**2** 須恵器、杯蓋、器高は低く低平で、扁平でボタン状に近い擬宝珠状のつまみがつく。口縁端部は、丸みを帯び退化した嘴状を呈す。口径15.9cm、器高1.3cmを測る。色調は灰色、胎土に粗い石英粒を少し含み、焼成は良好。**3** 須恵器、杯蓋、器高はやや高く、口縁端部は嘴状を呈すが、やや丸みを帯び内面の曲面も浅い。口径16.6cm、残高1.8cmを測る。色調は灰色、胎土に石英粒を多く含み、焼成は良好。**4** 須恵器、杯蓋、器高は低く低平で、口縁端部はわずかに嘴状を留める。口径19.2cm、残高1.4cmを測る。色調は灰色、胎土に砂粒を多く含み、焼成は不良で軟質。**5** 須恵器、杯蓋、器高は低く低平で、口縁端部は丸みを帯び退化した嘴状を呈す。口径15.2cm、残高1.2cmを測る。色調は灰色、胎土にやや粗い石英粒を含み、焼成は良好。**6** 須恵器、杯蓋、器高は低く低平と考えられる。口縁端部は、丸みを帯び退化した嘴状を呈す。残高1.4cmを測る。色調は灰白色、胎土に砂粒を含み、焼成は良好。**7** 土師器、甕、口縁部は大きく開く。調整は、外面を縦位のハケメの後にナデ、内面には蓋いのハケメが施される。色調はにぶい橙色、胎土に粗い石英粒を含み、焼成は良い。

SK7（図11）

平面形は東西に長い楕円形を基本とするが、西側は不整形となる。SK5に切られるがSK8とSK9を切っている。長さ2.40 m、残幅1.42 m、深さ0.14 mを測る。

SK7 出土遺物（図14）

1 須恵器、杯蓋、器高は低く直線的で低平、口縁端部は丸みを帯びた嘴状を呈す。口径 17cm、残高 1.0cm を測る。色調は灰色、胎土に細砂粒を少し含み、焼成は良い。**2** 須恵器、杯蓋、器高は低く低平、口縁端部は丸みを帯びわずかに嘴状を留める。口径 15.6cm、残高 1.0cm を測る。色調は灰色、胎土に砂粒を含み、焼成は良好。**3** 須恵器、杯蓋、器高は低く直線的で低平、口縁端部は丸みを帯びわずかに嘴状を留める。口径 17cm、残高 1.2cm を測る。色調は灰色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良い。**4** 須恵器、杯身、口縁部は直線的に外反し、高台はやや高く細身で少し外方に張る。口径 17.4cm、器高 11.2cm、底径 11.2cm を測る。色調は灰色、胎土に白色粒子と砂粒を含み、焼成は良好。**5** 須恵器、杯身、高台は低く細身で外方に若干傾斜する。残高 1.3cm、底径 9.0cm を測る。色調は青灰色、胎土に白色粒子を少し含み、焼成は良好。**6** 須恵器、杯身、口縁部は外反気味に立ち上り器高が低い。口径 13.6cm、残高 3.0cm を測る。色調は灰色、胎土、焼成ともに良好。**7** 須恵器、皿、口縁部は直線的に外反する。口径 18.0cm、器高 1.9cm、色調は灰色、胎土に白色粒子を少し含み、焼成は良いが軟質気味。**8** 土師器、杯身、高台は低く細身で直立する。残高 1.7cm、底径 9.0cm を測る。色調は橙色、胎土に白色粒子を含み、焼成は良い。**9** 土師器、甕、口縁部は大きく外反し、頸部の内面は突出して明確な稜線を描く。調整は外面にハケメ、内面にはヘラケズリを施す。口径 25.0cm、残高 4.7cm を測る。

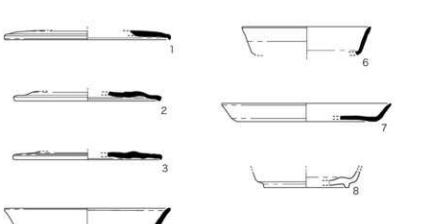


図 14　SK7 出土遺物実測図 (1/4)

SK8（図 11）

平面形は楕円形を呈し、SK7 に切られ、SK9 を切る。長さ 1.34 m、幅 0.98 m、深さ 0.10 m を測る。

SK8 出土遺物（図 15）

1 須恵器、杯蓋、器高はやや低く全体に丸みを帯び、口縁端部を折り曲げて嘴状とするが、丸みのある玉縁状を呈す。口径 14.0cm、残高 2.0cm を測る。色調はにぶい灰色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。**2** 土師器、甕、口縁部は直線的に開く。残高 3.6cm を測る。色調はにぶい橙色、胎土にやや粗い砂粒を含み、焼成は良い。

SK9（図 11）

平面形は隅丸方形か、SK7、SK8 に大きく切られている。残長 1.32 m、残幅 1.1 m、深さ 0.05 m を測る。

SK9 出土遺物（図 15）

1 須恵器、杯蓋のつまみ、扁平なボタン状を呈す。直径 2.4cm、残高 1.2cm を測る。色調は淡褐色、やや粗い砂粒を含み、焼成は良好。**2** 須恵器、杯蓋、口縁端部は嘴状を呈す。残高 1.2cm を測る。色調は淡灰色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。**3** 須恵器、杯蓋、口縁端部は嘴状を呈す。残高 1.0cm を測る。色調は淡灰色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。**4** 須恵器、杯身、口縁部は直線的に外反し、端部は鋭い。残高 2.7cm を測る。色調はにぶい淡灰色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。

SK10（図 9）

平面形は隅丸方形を呈し、北西の角部分にピット状の掘り込みを有す。SK4 に北東部分の一部を切られている。長さ 2.82 m、幅 2.23 m、深さ 0.10 m を測る。

SK10 出土遺物（図 15）

1 須恵器、杯蓋、器高は高く全体に丸みを帯びる。口縁端部は嘴状を呈し、外面は沈線状に窪む。口径 13.2cm、器高 2.5cm を測る。色調は青灰色、胎土に粗い石英粒を含み、焼成は良好。**2** 須恵器、杯身、口縁が直線的に開き、底部付近は丸みを帯びる。高台は幅広だがかなり低く、外方にやや傾斜する。口径 14.4cm、器高 3.5cm、底径 8.6cm を測る。色調は灰白色、胎土は良好、焼成はやや不良で軟質。**3** 須恵器、杯身、体部下方は丸みを帯びており、口縁部の広がりは少ないと考えられる。高台はやや高さがあり外方にわずかに張り出す。残高 4.0cm、底径 9.2cm を測る。色調は灰赤色、胎土に石英粒をわずかに含み、焼成は良好。なお、底部の高台中央付近に墨書があり、「与」の変体仮名に近い。**4** 須恵器、杯身、体部は外方に開き、高台は低く外方に強く開く。残高 2.8cm を測る。色調灰白色、胎土に白色粒子を少し含み、焼成はやや不良で軟質。**5** 須恵器、杯、口縁部は直線的に開き、底部がわずかに外方に張る。口径 12.5cm、器高 6cm、底径 8.2cm を測る。色調は灰白色、胎土は良好、焼成は不良で軟質。**6** 須恵器、長頸壺、口縁部はやや下がる。口径 11.0cm、残高 3.0cm を測る。色調は灰色、胎土に粗い石英粒を含み、焼成は良好。**7** 須恵器、甕、口縁部は大きく開き、口縁端部の外面が段状を呈す。残高 3.1cm を測る。色調は灰色、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや不良。**8** 土師器、甕、口縁部は外湾し、頸部内面の屈折箇所が稜線状を呈す。調整は内面に斜位のヘラケズリを施す。残高 7.0cm

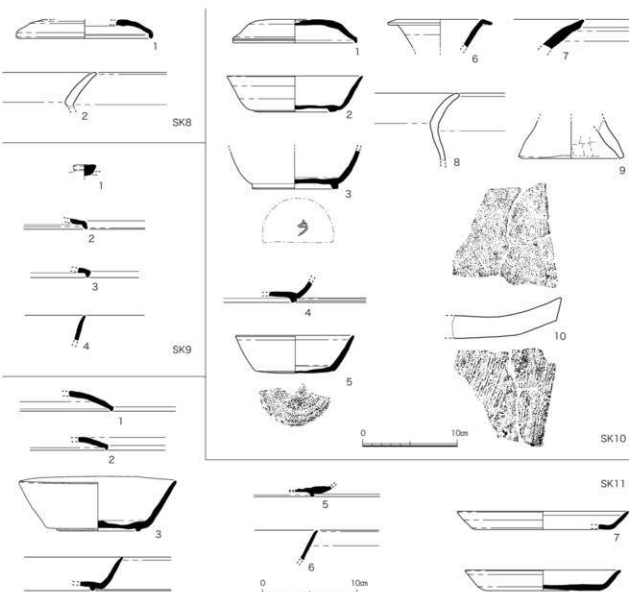


図 15　SK8、9、10、11 出土遺物実測図（1/4）

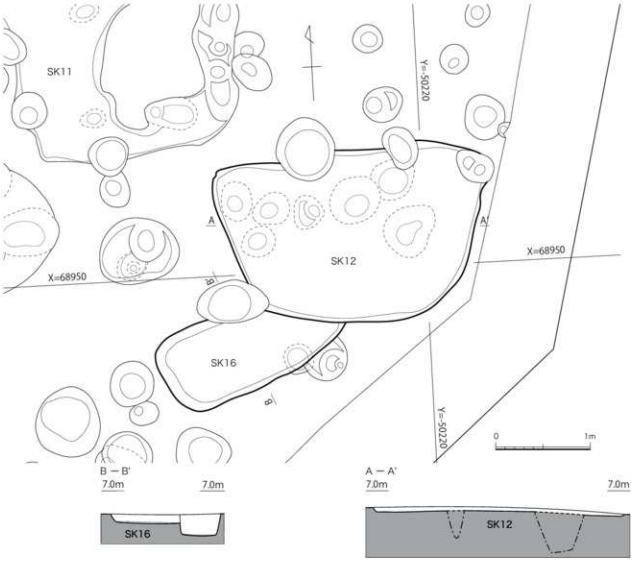


図16　SK12、SK16平面図、断面図（1/40）

を測る。色調は浅黄橙色、胎土に粗い砂粒を多く含み、焼成は不良で軟質。**9** 弥生土器、器台、残高3.1cm、底径11.2cmを測る。色調はにぶい褐色、胎土に多量の砂粒を含み、焼成は良い。**10** 平瓦片で内面には布目痕が、外面には縄目のタタキ痕が観察される。残長10.7cm、残幅11.5cm、厚さ2.3cmを測る。色調は浅黄橙色、胎土に砂粒及び褐色粒子を多く含み、焼成はやや不良で軟質。

SK11（図9）

平面形は方形を呈すと考えられるが、全体の1/2を近く削平されており、北側をSK10に切られる。長さ3.10 m、幅2.40 m、深さ0.08 mを測る。

SK11 出土遺物（図15）

1 須恵器、杯蓋、器高はやや高く、口縁端部はやや丸みのある嘴状を呈す。残高2.1cmを測る。色調は青灰色、胎土に石英の細粒を含み、焼成は良好。**2** 須恵器、杯蓋、器高はやや低く、口縁端部は嘴状を呈し内面が窪む。残高1.4cmを測る。**3** 須恵器、杯身、口縁部は直線的にやや大きく開き、高台は低く小さい。口径16.4cm、器高5.8cm、底径8.9cmを測る。色調は淡橙褐色、胎土に細砂粒を少量含み、焼成は良好。**4** 須恵器、杯身、口縁部は直線的に開き、体部下方が低位に位置する。高台は低く丸みを帯びて小さい。残高3.5cmを測る。色調は褐灰色、胎土に微量の石英粒を含み、焼成は良好。**5** 須恵器、杯身、高台は低く細身で小さい。残高1.1cmを測る。色調は青灰色、胎土に石英粒を含み、焼成はやや不良。**6** 須恵器、杯身、薄手で口縁部が直線的に立ち上る。残高3.2cmを測る。色調は

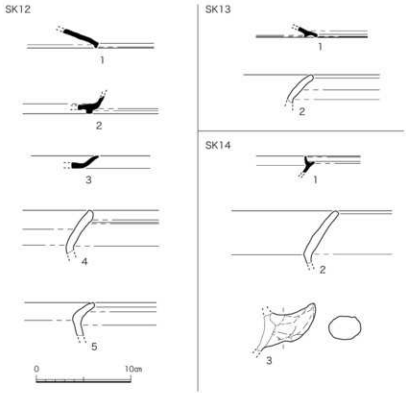


図 17　SK12、13、14 出土遺物実測図(1/4)

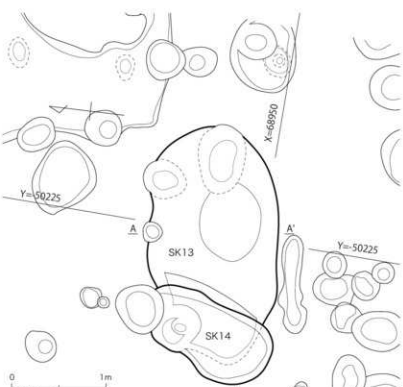


図 18　SK13、SK14 平面図、断面図（1/40）

灰色、胎土に砂粒を含み、焼成は不良。**7** 須恵器、皿、口縁部が直線的に開く。口径 18.2cm、器高 1.95cm、底径 14.0cm を測る。色調は灰白色、胎土に砂粒を含み、焼成は良好。**8** 須恵器、皿、口縁部が直線的に開くが、体部下方から底部にかけて丸みを帯びる。口径 16.4cm、器高 2.2cm、底径 11.8cm を測る。色調は体部が灰色で底部は橙色、胎土に石英を含む砂粒を多く含み、焼成は不良で軟質。

SK12（図 16）

平面形は隅丸の台形状を呈し、SK16 を切る。長さ 2.72 m、幅 1.40 m、深さ 0.10 m を測る。

SK12 出土遺物（図 17）

1 須恵器、杯蓋、器高はやや高く、口縁部が直線的となり口縁端部は嘴状を呈す。残高 2.0cm を測る。色調は青灰色、胎土に白色粒子を少し含み、焼成は良好。**2** 須恵器、杯身、高台はやや低く直立する。残高 1.8cm を測る。色調は灰白色、胎土、焼成は良好。**3** 須恵器、皿、器高は低く、全体にやや丸みを帯びる。残高 1.3cm を測る。色調は灰色、胎土に白色の微粒子を多く含み、焼成は不良で軟質。**4** 赤焼土器、甕、口縁部は直線的に外反し、口縁端部が玉縁状となる。残高 4.6cm を測る。色調は橙色、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや不良。**5** 土師器、甕、口縁部がくの字状を呈し、内面にヘラケズリを施す。残高 3.5cm、色調は明灰褐色、胎土に砂粒を含み、焼成は良い。

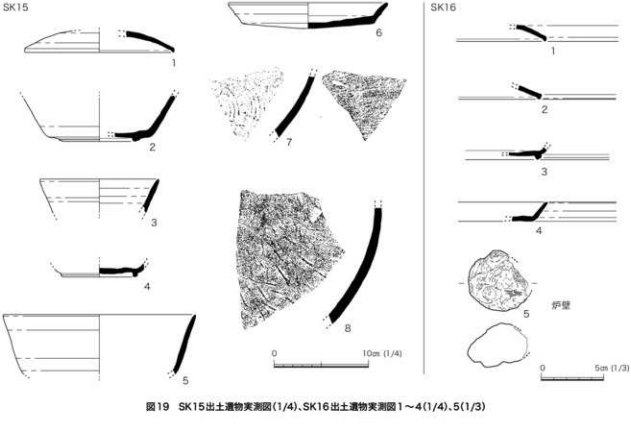


図19　SK15出土遺物実測図(1/4)、SK16出土遺物実測図1～4(1/4)、5(1/3)

SK13（図 18）

平面形は楕円形を呈し、西側は2段に掘り込まれるが、SK14 に切られ判然としない。残長 1.87 m、幅1.35 m、深さ 0.10 mを測る。

SK13 出土遺物（図 17）

1 須恵器、杯蓋、内面にかえりを有すが、口縁端部とほぼ同じ高さとなる。残高 1.1cm を測る。色調は灰白色、胎土は良好、焼成は不良で軟質。**2** 土師器、甕、口縁部は直線的に開く。残高 3.0cm を測る。色調は灰白色、胎土に砂粒を含み、焼成は不良で軟質。

SK14（図 18）

平面形は楕円形を呈し SK13 を切っている。残長 1.21 m、幅 0.77 m、深さ 0.12 mを測る。

SK14 出土遺物（図 17）

1 須恵器、杯身、立ち上りが直立する。残高 1.8cm、立ち上り高 0.5cm を測る。色調は赤灰色、胎土に白色粒子を含み、焼成は良好。**2** 土師器、甕、口縁部が直線的に外反し、頸部は屈折し内面に稜線が廻る。調整は外面にナデ、内面の頸部以下にヘラケズリが施される。残高 5.6cm、色調は橙色、胎土に砂粒を含み、焼成は良い。**3** 土師器、甑の把手、牛角状を呈し、指頭によるナデ及び、オサエにより仕上げる。残長 5.4cm、幅 3.4cm、厚さ 2.5cm を測る。色調は橙色、胎土に砂粒を含み、焼成は不良で軟質。

SK15（図 11）

平面形は円形状を呈すと考えられるが、SK5 に 1/2 以上を切られている。残長 1.34 m、残幅 0.55 m、深さ 0.05 mを測る。

SK15 出土遺物（図 19）

1 須恵器、杯蓋、器高は高く全体に丸みを帯び、口縁端部は弱いが嘴状を呈す。口径 15.8cm、残高 2.3cm を測る。**2** 須恵器、杯身、高台はやや高いが細身で外面が頓斜する。残高 1.4cm、底径 8.0cm を測る。色調は青灰色を呈し、胎土、焼成ともに良好。**3** 須恵器、杯身、体部は口縁部に向かって直線的に開き、高台は低く外面が頓斜する。残高 4.6cm、底径 8.6cm を測る。色調は灰色、胎土に砂粒を少し含み、焼成は良好。**4** 須恵器、杯身、口縁部は直線的にやや外反する。口径 12.6cm、残高 3.6cm を測る。色調は灰白色、胎土は良好、焼成はやや不良で軟質気味。**5** 須恵器、杯身、口縁部は直線的にやや外反する。口径 20.4cm、残高 6.3cm を測る。色調は灰色、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや不良で軟質気味。**6** 須

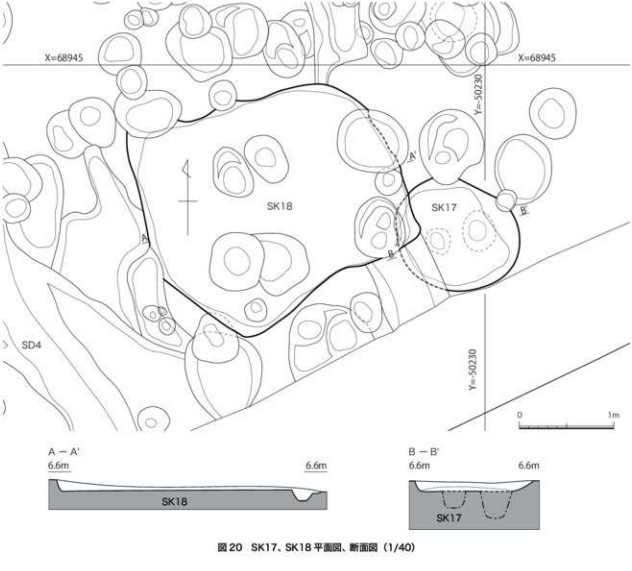


図20　SK17、SK18 平面図、断面図（1/40）

恵器、皿、口縁部は外反し、底部は外湾する。口径 16.8cm、器高 2.7cm、底径 13.7cm を測る。色調は灰色、胎土に砂粒を含み、焼成は不良で軟質、細かな気泡が多い。**7** 須恵器、甕、胴下半部の破片と考えられる。外面には細身で幅が狭い横位の平行タタキメが、内面には車輪文状の当具痕が観察される。残高 6.9cm を測る。色調は灰色、胎土に砂粒を含み、焼成はやや不良で軟質気味。**8** 須恵器、甕、胴下半部の破片と考えられる。外面にはハケメのような細かな平行タタキメとカキメが観察され、内面にはＶ字状あるいは、棒状の短線が連続的に存在している。内面のものは当具痕と考えられ、単線の周囲には薄く半同心円状のラインが観察されることから、**7** と同様に車輪状の当具痕と推定される。残高 12.2cm を測る。色調は灰色、胎土に白色粒子を多く含み、焼成は良好。

SK16（図 16）

平面形は隅丸長方形を呈すと考えられるが、SK12 に東側を切られている。残長 1.67 m、幅 0.88 m、深さ 0.09 m を測る。

SK16 出土遺物（図 19）

1 須恵器、杯蓋、器高はやや高く、口縁端部は嘴状の形状を留めるが丸みを帯びる。残高 1.7cm を測る。色調は灰色、胎土に細砂粒を含み、焼成は不良で軟質。**2** 須恵器、杯蓋、口縁部は直線的で、口縁端部は嘴状を留めるが、内面の窪みは浅く丸みを帯びている。残高 1.5cm を測る。色調は青灰色、胎土に砂粒を含み、焼成は良好。**3** 須恵器、杯身、高台は低く外方に傾斜する。残高 1.3cm を測る。色調は灰色、胎土に白色粒子を含み、焼成は良好。**4** 須恵器、皿、口縁部が直線的に開く。残高 2.0cm を測る。色調は灰白色、胎土に白色の微粒子を含む。焼成は不良で軟質。**5** 炉壁片、長さ 4.7cm、幅 4.7cm 以上、厚さ 3.7cm を測る。色調は橙色、胎

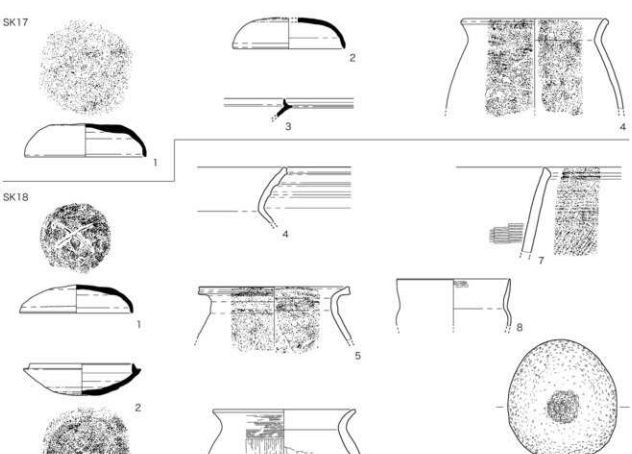


図21　SK17出土遺物実測図(1/4)、SK18出土遺物実測図1～8(1/4)、9(1/3)

土にスサを含む。

SK17（図20）

平面形は円形状を呈すと考えられる。長さ1.30 m、残幅1.20 m、深さ0.12 mを測る。

SK17出土遺物（図21）

1須恵器、杯蓋、口縁部は直立して丸みを帯び、天井部外面は平坦でヘラ記号を有す。口径12.8cm、器高3.5cmを測る。色調は灰白色、胎土に石英粒を含む。2須恵器、杯蓋、口縁部はやや外反し、全体に丸みを帯びる。口径12.0cm、器高3.3cmを測る。色調は青灰色、胎土に白色粒子を多く含み、焼成は良好。3須恵器、杯身、立ち上りは垂直に近く、内面に明瞭な屈折のラインが廻る。残高2.0cmを測り、色調は青灰色、胎土に粗い石英粒を含み、焼成は良好。4赤焼土器、甕、口縁部は緩やかに外反し、なで肩で長胴に近い。外面はタタキメ、内面には当具痕が観察されるが、表面風化のため明瞭ではない。口径15.6cm、残高9.5cmを測る。色調はにぶい赤褐色、胎土に細砂粒を多く含み、焼成は良い。

SK18（図20）

平面形は隅丸方形状を呈しSK17を切る。長さ2.81 m、幅2.12 m、深さ0.12 mを測る。

SK18出土遺物（図21）

1須恵器、杯蓋、口縁部は垂直に近く、体部との境が少し屈折し、器高はやや低い。天井部外面にヘラ記号を有す。口径12.0cm、器高3.0cmを測る。色調は青灰色、胎土に粗い石英粒を含み、焼成は良好。2須恵器、杯身、立ち上りは厚手で低く、底部外面にヘラ記号を有す。口径11.0cm、器

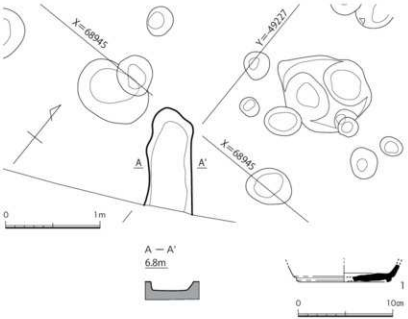


図 22　SD1 平面図、断面図（1/40）、出土遺物実測図（1/4）

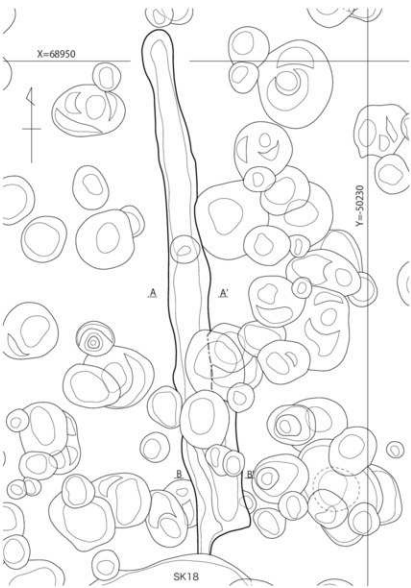
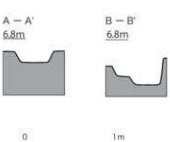


図 23　SD2 平面図、断面図（1/40）

高 3.4cm を測る。色調は青灰色、胎土に粗い砂粒を含み、焼成は良好。**3** 須恵器、杯身、立ち上りは高く、底部は平底気味となる。口径 10.0cm、器高 3.5cm を測る。色調は暗青灰色、胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好。**4** 赤焼土器、甕、口縁部は外反し、外面には突帯状の隆起線が 3 条廻る。残高 6.0cm を測る。色調は橙色、胎土に粗い砂粒を多く含み、焼成は不良で軟質。**5** 赤焼土器、甕、口縁部は大きく外反し、口縁端部の外面はわずかに凹面を呈す。口径 16.0cm、残高 5.7cm を測る。色調は明赤褐色、胎土に細かい石英粒を多く含み、焼成は不良で軟質。**6** 土師器、甕、口縁部は外湾し、胴部がやや張る。頸部外面はカキメ状のハケメ、胴部は縦位及び、斜位のハケメ、頸部内面付近はナデ、胴部内面はヘラケズリが観察される。口径 15.2cm、残高 9.8cm を測る。色調はにぶい橙色、胎土に粗い石英粒と砂粒を含み、焼成は良い。**7** 赤焼土器、甑、口縁部は直線的で少し外反し、外面上部にはカキメを施し、下部から胴部にかけて斜位の平行タタキメが観察される。また、内面下方には粗いハケメ状の当具痕が残る。残高は 7.0cm を測り、色調はにぶい赤褐色、胎土に砂粒を多く含み、焼成は良い。**8** 土師器、丸底壺もしくは鉢か、口縁部は直立し、屈折する頸部から肩部が少し張る



形状を呈す。口径 12.0cm、残高 5.0cm を測る。色調は明赤褐色、胎土に白色粒子を多く含み、焼成は不良で軟質。9 石器、花崗岩系の円礫を使用した窪み石で、表裏両面の各中央に 1 箇所ずつの窪みが位置する。長さ 9.8cm、幅 8.7cm、厚さ 5.7cm を測る。

溝状遺構

SD1（図 22）

調査区南端部に位置し、一部検出されたが主要部分は調査区外へと続く。残長 1.06 m、幅 0.44 m、深さ 0.08 m を測る。

SD1 出土遺物（図 22）

1 須恵器、杯身、高台は細身で低く、外面が傾斜する。残高 1.8cm、底径 10.0cm を測る。色調は灰色、胎土に細砂粒をわずかに含み、焼成は良好。

SD2（図 23）

調査区南側端部にあって、SD1 の西側に位置する。SK18 に切られているが調査区外の南側に続く。流路の方向は北から南を示し、残長 3.84 m、幅 0.44cm、深さ 0.14 m を測る。出土遺物はない。

SD 3（図 24）

調査区南西側端部にあって、SD2 の西側に位置する。流路は調査区外の北側に延びる。残長 2.60 m、幅 0.17cm、深さ 0.10 m を測る。出土遺物はない。

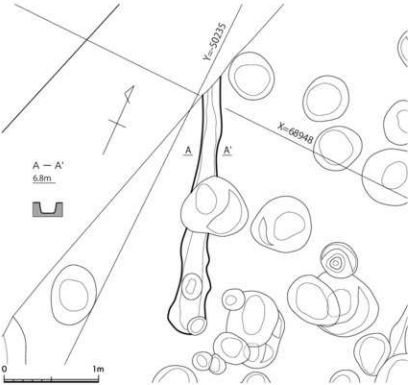


図 24　SD3 平面図、断面図（1/40）

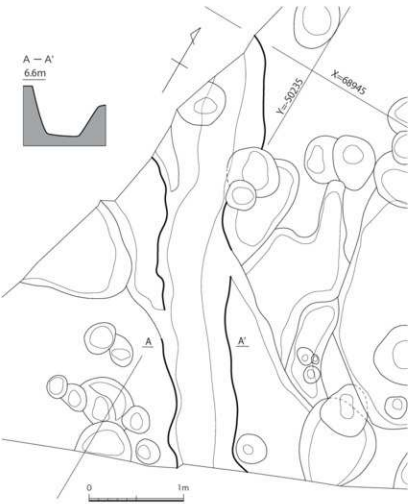


図 25　SD4 平面図、断面図（1/40）

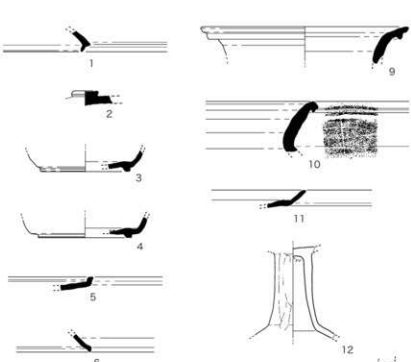


図 26　SD4 出土遺物実測図（1/4）

SD4（図 25）

調査区南南西の端部に位置し、形状から 2 段掘りの様相を呈す。溝のごく一部を検出したが、北側及び、南側の調査区外へと続く。残長 4.58 m、幅 0.73 m、深さ 0.51 mを測る。

SD4 出土遺物（図 26）

1 須恵器、杯蓋、器高は高く全体に丸みのある形状と考えられ、かえりは内傾し位置が高い。残高 2.2cm を測る。色調は淡灰色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。**2** 須恵器、杯蓋、つまみは扁平なボタン状を呈す。残高 1.5cm を測る。色調は淡灰色、胎土にやや粗い砂粒を少し含み、焼成は良好。**3** 須恵器、杯身、高台は低くやや外方に傾斜する。残高 2.2cm、底径 9.4cm を測る。色調はにぶい灰色、胎土に砂粒を含み、焼成は良好。**4** 須恵器、杯身、高台はやや幅広だが低く直立する。残高 2.3cm、底径 10.0cm を測る。色調は淡灰色、胎土に細砂粒を少し含み、焼成は良好。**5** 須恵器、高杯、杯部の口縁部は強く屈折し、わずかに外反する。残高 1.5cm を測る。胎土に細砂粒を少量含み、焼成は良好。**6** 須恵器、高杯、脚部は直線的に開き、端部が丸みを帯びた嘴状を呈す。残高 1.8cm を測る。色調は暗灰色、胎土に細砂粒を少量含み、焼成は良好。**7** 須恵器、短頸壺の蓋、口縁部は直立し、口縁端部は丸みを帯びて外方に突出する。口径 12.6cm、器高 2.6cm を測る。色調は灰色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。**8** 須恵器、甕か、口縁部は逆ハの字状に開き、下方に弱い段を有す。口径 13.8cm、残高 3.2cm を測る。色調は淡灰色、胎土に粗い砂粒を含み、焼成は良い。**9** 須恵器、甕、口縁部は大きく外反し口縁端部の直下に 1 条の丸みを帯びた三角状突帯を廻らす。口径 22.0cm、器高 3.9cm を測る。色調はにぶい灰褐色、胎土にやや粗い砂粒を含み、焼成は良好。**10** 須恵器、甕、口縁部は外反し、口縁端部下に下方を向く鋭利な三角状の突帯を付す。残高 5.3cm を測る。色調は青灰色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。**11** 須恵器、皿、口縁部は外反し開きがやや大きい。残高は 1.9cm、色調は灰色、胎土に砂粒を含み、焼成は良好。**12** 土師器、高杯、長脚で下方は屈折して底部に至る。調整は外部に縦位のやや強いナデを施す。残高 9.7cm を測る。色調は橙色、胎土に粗い砂粒を含み、焼成は良好。**13** 土師器、甑の把手、形状は牛角状を呈し、外面に指頭によるナデ及び、オサエを施す。残長 6.2cm、幅 3.6cm、厚さ 3.0cm を測る。色調は橙色、胎土に白色粒子及び、砂粒を含み、焼成は良好。**14** 土師器、移動式カマド、左側の脚部片で、直立する。残長 6.4cm、残高 4.5cm を測る。色調は淡橙色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。

SP 出土遺物（図 27）

1 須恵器、杯蓋、全体にやや扁平で、口縁部内面のかえりはやや内傾し、口縁端部下にわずかに

覗く。口径 10.4cm、器高 2.3cm を測る。色調は灰色、胎土に細砂粒を少し含み、焼成は良好。**2** 須恵器、杯蓋、口縁部は直線的で、内面のかえりはほとんど見えない。残高 1.8cm を測る。色調は淡褐橙色、胎土に砂粒を含み、焼成は良好。**3** 須恵器、杯身、口縁部は外反し、高台は幅広だが、低く外反する。口径 11.1cm、器高 3.8cm、底径 6.9cm を測る。色調は灰色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。**4** 須恵器、高杯、脚部は直線的に広がり、端部が屈折して外方に開く。残高 3.5cm、底径 14.0cm を測る。色調は淡褐灰色、胎土に砂粒を含み、焼成は良好。**5** 須恵器、皿、口縁部は外反し、底部がわずかに外湾する。器高 2.2cm、底径 16.4cm を測る。色調は灰色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。**6** 土師器、皿、口縁部は開き、底部がわずかに上げ底を呈す。口径 19.6cm、器高 1.8cm、底径 15.5cm を測る。色調は淡橙色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良い。**7** 土師器、移動式カマド底部か、脚部の前面に貼付けたものが剥がれている。残長 11.7cm、幅 4.8cm、厚さ 3.3cm を測る。色調は暗橙色、胎土に粗い砂粒を多く含む。焼成は良好。**8** 土製品、土錘、長さ 6.4cm、径 2.0cm、孔径 0.6cm を測る。色調はにぶい褐色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良い。**9** 石器、欠損した砂岩製の砥石、4 面を使用し、残長 5.6cm、幅 5.6cm、厚さ 5.1cm を測る。**10** 玉類、欠損した琥珀製の丸玉、径 1.2 ～ 1.3cm を測る。

おわりに

今回の調査では、掘立柱建物 1 棟、土坑 18 基、溝状遺構 4 条、多数のピット等を検出した。

土坑は調査区の中央付近に集中しており、狭い範囲での切り合いが著しい。また、ピットは調査区の中央から南側に集中しており、土坑との切り合いも多い。特に南側ではピット自体の規模が大きく、集中の度合いもさらに増している状況がみられ、遺構の輪郭ライン や切り合いの把握はかなり困難であった。なお、土坑の形状や集中度に加え、ピット等が密に存在する状況は、内橋鏡遺跡 3 次調査[1]で把握された様相に近い。

各遺構の時期を概観すると、SK2 は須恵器の低平な杯蓋が大半を占め、口縁端部は折り曲げず嘴状口縁の痕跡程度、あるいは形状を留めない形状を呈す。これらは、牛頭編年[2]のⅧ期に該当し、8 世紀末～ 9 世紀初頭に位置すると考えられ、土師器の杯（**13**）や赤焼土器の甕（**14**）の時期[3]と重ねて矛盾はなかろう。SK4 の須恵器杯蓋は、低平であるが口縁端部を折り曲げ嘴状口縁の形状を留めるが丸みを帯びる。須恵器杯身は、高台が低く外方に傾斜して体部との境が不明瞭なものがある。須恵器皿は口縁部が斜方向に開き、須恵器の短頸壺蓋の口縁部は外方に張り出しており、いずれも牛頭編年ⅧB に該当し、8 世紀中頃～後半の時期と考えられる。SK5 は須恵器杯蓋の口縁端部が、折り曲げた明瞭な嘴状を示すものが含まれるが、その他は丸みを帯びた嘴状口縁の形状を留めており、SK4 と同じく 8 世紀中頃～後半の時期と考えられる。また、SK6・7・10・11・12・15・16 について、いずれも須恵器の杯蓋や杯身、皿といった器種の特徴が近似しており、概ね 8 世紀中頃～後半の時期として捉えられよ

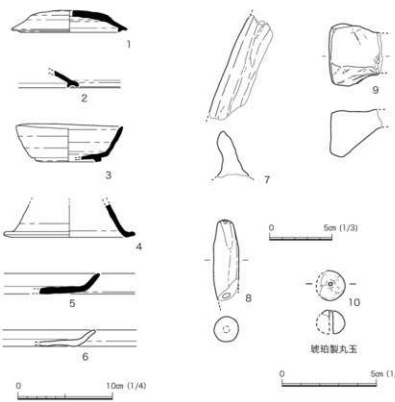


図 27　SP 出土遺物実測図（1 ～ 7、9：1/4）（8：1/3）（10：1/2）

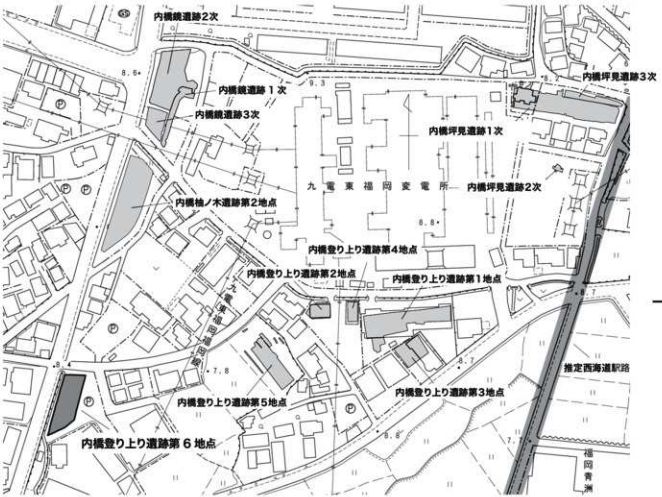


図28　内橋登り上り遺跡第６地点周辺図(下は1947年米軍撮影の航空写真)

う。SK17の須恵器杯蓋は口径が小さく、粗雑なもので、牛頸編年のⅣBとして7世紀前半の時期と考えられ、SK18もそれに近い時期であろう。SK13は遺物が少ないが牛頸編年のⅥ期として7世紀末になろうか、SK9も少ない遺物ながら須恵器杯蓋の口縁端部が明瞭な嘴状を呈しており、牛頸編年のⅦ期として8世紀前半に位置付けられよう。

土坑は

SK17・18（7世紀前半）

SK13（7世紀末）

SK9（8世紀前半）

SK4・5・6・7・10・11・12・15・16（8世紀中頃～後半）

SK2（8世紀末～9世紀初頭）

というように、連続した形成が見受けられる。中でも、8世紀中頃～後半のものが多く、本遺跡の中心的な時期と考えられ、SK5やSK10に伴う瓦も当該期の所産であろう。なお、内橋坪見遺跡[4]出土の大宰府分類軒平瓦642A型式、軒丸瓦241型式と同様のものが内橋柚ノ木遺跡第2地点[5]でも出土しており、本遺跡出土の瓦も同類と考えられる。

今回調査を行った内橋登り上り遺跡第6地点では、7世紀前半～9世紀初頭に至る土坑群が確認され、8世紀中頃から後半を中心とする時期に集中することが判明した。本遺跡の北側に位置する内橋鏡遺跡1次調査[6]及び3次調査[7]では、7世紀代の土坑15基以上の集中が確認され、新羅土器や滑石製の権といった重要物が出土している。また、内橋登り上り遺跡第2地点[8]では、6世紀後半と7世紀前半の2時期(古・新）を中心とする土坑15基が確認されている。それらを形成順に整理すると、内橋登り上り遺跡第2地点（古）⇒内橋鏡遺跡3次・内橋登り上り遺跡第2地点（新）⇒内橋登り上り遺跡第6地点の順となり、南側に向かって時期的に新しくなる様相がみられる。これは、内橋坪見遺跡を含む現在九州電力送配電東福岡変電所が所在する丘陵一帯を中核として、内橋鏡遺跡、内橋柚ノ木遺跡、内橋登り上り遺跡といった各周辺遺跡へと拡大化する様相を示したもので、今回の調査により、8世紀後半頃になると内橋坪見遺跡等の中心からかなり南西側にまで居住域が広がる状況が窺えよう。

(1) 粕屋町教育委員会 2020『内橋カラヤ遺跡第2地点、内橋カラヤ遺跡第3地点、内橋鏡遺跡3次』粕屋町文化財調査報告書第51集

(2) 大野城市教育委員会 2008『牛頸窯跡群－総括報告書Ⅰ－』大野城市文化財調査報告書77集

(3) 粕屋町教育委員会 2002「江辻遺跡第6地点」粕屋町文化財調査報告書第18集

(4) 粕屋町教育委員会 2013「内橋坪見遺跡概要報告書」粕屋町文化財調査報告書第35集
粕屋町教育委員会 2019「内橋坪見遺跡1次・2次」粕屋町文化財調査報告書第44集

(5) 粕屋町教育委員会 2019「内橋柚ノ木遺跡第2地点」粕屋町文化財調査報告書第55集

(6) 粕屋町教育委員会 2015「内橋鏡遺跡」粕屋町文化財調査報告書第37集

(7) (5) に同じ。

(8) 粕屋町教育委員会 1997「内橋登り上り遺跡第2地点」粕屋町文化財調査報告書第11集

図版

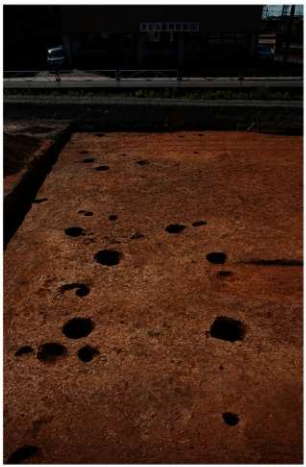
SK10-3 墨書「与」字カ（図15）

調査区北区全景（北東から）

調査区北区全景（南東から）

調査区中央区全景（北から）

調査区南区全景（北から）



SB1 完掘状況（東から）

SK1 完掘状況（西から）

SK2、SK3、SK4、SK7、SK8、SK9、SK10 完掘状況（北から）

SK2、SK3、SK7、SK8、SK9 完掘状況（東から）

SK3、SK4、SK5、SK7 完掘状況（東から）

SK12、SK16 完掘状況（北から）

SK13、SK14 完掘状況（北東から）

SK17、SK18 完掘状況（北から）

SD4 完掘状況（北西から）

SD4 完掘状況（北西から）

SK2-13(図8)

SK10-3（図15）

SK4-7（図10）

SK11-3（図15）

SK6-1（図13）

SK15-7（図19）

SK6-2（図13）

SK17-1（図21）

SK17-4（図21）

SP-3（図27）

SK18-1（図21）

SP-7（図27）

SK18-2（図21）

SP-8（図27）

SD4-10（図26）

SP-10（図27）

報告書抄録

ふりがな	うちはしのぼりあがりいせきだい６ちてん
書名	内橋登り上り遺跡第６地点
シリーズ名	粕屋町文化財調査報告書
シリーズ番号	第 58 集
編著者名	福島日出海、髙橋幸作
編集機関	粕屋町教育委員会
所在地	〒811-2314　福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目１番１号
発行年月日	2022 年３月 31 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
内橋登り上り遺跡 第６地点	福岡県糟屋郡粕屋町 大字内橋（おおあざうちはし）295-5、295-9、561-5	403491	280082	33°37′14″	130°27′31.3″	2020.7.8 ～ 2020.12.11	635㎡	県道福岡東環状線

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
内橋登り上り遺跡 第６地点	集落	古墳時代～奈良時代	掘立柱建物、土坑、溝状遺構	土師器、須恵器、瓦、石器	

要約

調査では、掘立柱建物１棟、土坑 18 基、溝状遺構４条、多数のピット等を検出した。遺物は、８世紀後半を中心とする須恵器と土師器類が中心で、数点の瓦片も含まれる。また、須恵器杯身１点の底部には、墨書が観察される。調査区中央部付近では、ある程度限定された範囲内に切り合いが著しい壁穴状の遺構群が検出された。それらの平面形は隅丸方形の小形壁穴建物に近似するが、柱穴やカマドは確認できないため、方形土坑群として捉えられよう。

当遺跡は、内橋坪見遺跡を中心とする、それを取り巻く古代集落群内橋綾遺跡・内橋楠ノ木遺跡の一角をなすと考えられる。

内橋登り上り遺跡第６地点　粕屋町文化財調査報告書第 58 集

令和４（2022）年３月 31 日　発行

発行　粕屋町教育委員会

〒811-2314　福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目１番１号（粕屋町立歴史資料館）

印刷・製本　株式会社　九州カスタム印刷

〒812-0007　福岡県福岡市博多区東比恵三丁目 16-15